
晴れ時々サンタクロース

いぬ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

晴れ時々サンタクロース

【Nコード】

N7424S

【作者名】

いぬ

【あらすじ】

キヨンとハルヒのクリスマスイブ

(前書き)

クリスマス用に書いた小説です

十二月二十四日。時刻は夜。本日の天気は見事なまでの快晴。

大通りから外れているために光源といえは等間隔に並ぶ街灯しかない北風が容赦なく吹き荒ぶ光陽園駅前公園で、俺は襟を立てたコートの際間から白い息と共に言葉をこぼした。

「何やってんだ？」

長門宅で行われているクリスマスパーティーを満喫していた俺がこんなうすら寒い公園にいるのは、こことは違う世界に飛ばされたり過去にタイムトラベルしてみたり元クラスメートにナイフで脇腹を刺されることのようなもう二度と体験したくもないのにもう一度それを経験しなくてはいけないジレンマに比べたら、そうたいした理由からではない。

古泉の持ってきた各種ゲーム類や長門独壇だったコンピ研の造ったパソコンソフトに興じ時間を忘れるほど馬鹿騒ぎを続けていた結果、買い貯めていたジュースが底を付いた。零れた水がグラスに戻ることがないように飲んでしまった空のペットボトルがインチキ手品師がハンカチ被せて、スリー、ツー、ワン……ハイ元通り、になるわけもない。さあ大変だ、このままでは誰かが買い出しに寒冷前線まっただ中へ出かけなくてはいけない。古泉がボードゲームを抱えこれで決めましようと言わんばかりの視線を飛ばしているのを無視し、運ぶべきものがなく給仕の仕事ができなくてオロオロしている朝比奈さんに大丈夫ですよと目配せをしたが上手く伝わらなかつたらしく小さな頬を赤く染め、無言で頷く長門の意思をくみ取ることが出来ずただ見つめ合うだけの時間が過ぎてから俺が公平にジャンケンで決めようと言おうとした。

しかしそのマザーテレサも満足の平等主義な意見を無情にも邪魔する輩が現れた。誰かって？ 決まってる。

傍若無人なSOS団独裁者「涼宮ハルヒ」その人だった。

「キョン。これは由々しき事態よ。飲み物が無くなったわ。だから早急に買い出しに行つて来い！」

問答無用の命令形だった。そのあまりの横柄ぶりに開いた口が塞がらない、のは朝比奈さんただ一名。俺はというと、どうせこんなことだろうと予想していたので肩をすくめるだけだ。

だからといって、いかに俺が瀬戸内海のように広い心をもっていたとしてもただで受け入れるわけにはいかない。当然抗議する。

「おいハ……」

「行つて来い」

名前も言えやしない。ハルヒの追い詰めた獲物を狩る直前のジャッカルのような鋭い眼差しが真正面から突き刺さる。

「ここはジャ……」

「行つて来い」

公平平等平和的意見一切無視。ある意味清々しい。腰に手を当て胸を張り、威風堂々完全無欠天上天下唯我独尊ここに在り。

「……」

「行つて来い」

見つめ合うこと、否、脅える野兎を睨む研ぎ澄ました刃のような双眸を持つオオカミと時間にして数秒。体内時計にして永久ともとれる視線の邂逅をした後、

「……やれやれ」

嘆息と共に吐き出した。

とまあ、そんなわけで、俺はモンスーンがもたらす冬風の中へと

身を躍らせる羽目になったのだった、回想終わり、まる。

そして現在の俺は補給物資調達という重要任務を終え、引き続き運搬任務を遂行していた。補給のついでにちよっと思っことがあり、少し遠回りをしてとある“ブツ”を買ったりもしたが、これは許容範囲だろう。わざわざツンドラ気候に単身で挑んだんだ。これくらいこの寄り道は許されるはずだ。

帰り道。夜の短い散歩を兼ねた寄り道は俺の身体を芯から冷やした。コンビニ袋を提げたまま公園の自販機で熱い缶コーヒーをチョイス。出てきた簡易暖房物を握りしめ、束の間の休息をしていた。

それを見つけたのはそんなときだった。

それは点々と立ち並ぶ街灯の下で向かい合っている男女。男の背は俺とどっこいどっこいか、それより少し高いくらいだろう。暖かそうな黒いダウンを着ている。少女の方はそれより頭二つ分くらい小さい。長門くらいか？ 身長に合う華奢な体躯。短い頭髮に卵型の小さな輪郭。それを半分くらい隠しているピンク色のマフラーをしている。

初めはその二人を気にも留めていなかった。寒いしな。二人はどこにでもいる普通のカップルに見えた。ただ違うのはその二人が纏うどこかこそばゆいような空気。

ほんの少し距離を置き、男は直立不動。しかし、僅かに体が揺らいでいるように見える。まるで何かを待っているようだ。少女の方は、うつむき、気を付けの姿勢で両手を前で組んでいる。もじもじと小さな体をゆする姿はなんだか小動物めいていて、見ていて微笑ましい。

と、思っていたらいきなり耳を引っ張られた。

悲鳴を上げなかったのは奇跡に近い。氷点下に迫る気温の中を覆うものもなく素体で夜風にさらされていた耳は引っ張られただけで引き千切れるんじゃないかというくらいの激痛が走り、実際「ブチ

「っ」という音を聞いたような気がする。まあ、俺の幻聴にすぎなかったわけだがな。

俺の耳を遠慮の欠片も見せず引つ張るヤツに文字通り引きずられるまま近くの草陰に押し込まれ、そこでようやく俺は解放された。ホントに千切れるかと思った。それにしても、襲うにしてももう少し空気というものを考えてみてはどうなんだ？

「うるさい！ アンタなんか襲うわけないじゃないッ。それに空気が読めないのはアンタのほうでしょうがッ！」

声こそ怒っているような感じだが、その音量は聞き取れないほど小さい。必然と解放されたばかりの耳を近づけることになる。そうすると「うつ」と小さくうめき声を上げ、襲撃者　ハルヒは顔をそむけた。なにがしたいんだ、こいつは？

「まあいい。んで、なんでハルヒがこんなところにいるんだ？」

俺も釣られて小声になる。

「うるさい。黙ってなさい」

一蹴された。ついでに言うとうるさいのは俺よりハルヒの方だ。理不尽これに極まる。

しかし、これ以上余計なことをぬかすと更に面倒になることは確実なので大人しくハルヒに従うことにする。

それにしても、黙れと言われても他にすることもなく。ただハルヒの横顔を見つめていても精神安定上あまりよろしくない。てか、こいつはなにを真剣に見てるんだ？

隠れた草むらからハルヒの視線を追うと、そこには先ほどまで見ていたひと組のカップル。あれから特に動きがあったように見えない。いったいこのくそ寒い中なにをやってんだらうね？

「アンタ、あれ見て分かんないの？」

すぐ耳元でハルヒの声。そのあまりの近さに少し身を引きハルヒと目を合わせる。動いた際に擦れたコンビ二袋がガサリと音を立てる。

「分からん。あいにく俺は他人の心が読める高性能な脳は持ち得な

いんでな」

「バカ。アンタみたいなのにそんな上等な脳が備わるわけないでしょ。それにあんなのパツと見たら分かるでしょ。告白よ。こ、く、は、く。ホラ？」

ハルヒに目線で促され再度二人を除くと、もじもじとしていた少女が面を上げ、僅かにだがはつきりを頷いたところだった。

少し離れた、孤島のように外界から切り離された二人だけの島。そこから二人の喜びの音が聞こえる中、ハルヒが何かを呟いた。

「メリークリスマススイブ」

俺はそれに心底驚いた。ハルヒが人並みの祝辞を言えること以上に、その言葉に驚いた。なにせ、ほんの数時間前に全く同じ言葉を俺は言っていたんだからな。よもや、こいつは影でこっそり聞いていたんじゃないかと疑ってしまう。勿論そんなことがあるわけないのだが。

こうして出来上がった本当の意味でのカップルがぎこちなく手を繋いで離れていくのを確認した後、ようやく元の自販機まで戻ることになった。熱かったコーヒーは外気と俺の体温に奪われもはや温いだけの代物になっている。どうしてくれる？ 俺の百二十円。

「さ、用事がすんだんならさっさと帰るわよ。あたしは寒いところはコタツの上にミカンがないことの次くらいに嫌いなんだから」

無視かよ、俺の百二十円。

「まっつたく、何でお使いの一つもまともに出来ない団員のために団長自ら出歩かなくちゃいけないのかしら。ホラ、さっさと歩く！ みくるちゃんなんてあまりの渴きでせっかくしてあげたツインテールが萎れちゃったじゃない！」

ハルヒはそう言うと言い白いダウンコートを翻し颯爽と長門マンションに向かって歩き出した。

むう。喉が渴いたただけで髪の毛が萎れるかどうかはさておいて。朝比奈さんが辛そうにしているのは許し難い。そんなのにのんびりしていたつもりはないんだがな。

「ったく。往復十数分足らずの道で一時間近くもかかるなんて。情けないっいたらありやしない」

訂正。どうやら俺は相当あの店に留まっていたらしい。中が暖かったからということにしておこう。

ハルヒは俺を置いていくように一人でズンズン先に進んでいる。しばらく進むと先ほどのカップルが腕を組んで寄り添うように歩いていた。手からランクアップしたらしい。ハルヒはその二人をあっという間に追い付くと、今度は二人をチラ見もせず追い抜いた。俺も少し遅れて二人に追い付く。

“メリークリスマススイブ”

そう聞こえた気がした。それが二人から発せられた言葉なのか、はたまた俺の幻聴か。だが俺は振り返るようなことはしない。ただまっすぐ前を見て二人を追い抜いた。

俺は気付くとコートのポケットに手を入れ先ほどジュースとは別に買った“ブツ”に触れていた。手の平に収まるほどの小さな箱。それを触っていると冷えた手が心なしか暖かくなった気がした。

突然だが、俺はサンタクロースなんて信じちゃいない。前を行くハルヒもそうだろう。信じているならサンタを拉致しに街へSOS団率いて出かけている。

他のメンツ　朝比奈さんは少々怪しいが　も勿論信じていないだろうし、その他大勢の一般人達も一定の年齢になると信じなくなる。

それは当たり前のこと。

それが当たり前のこと。

それを寂しいと思ったことはない。それは当然のことなんだと割り切り、日常を生きている。

それでもクリスマスはやってくる。

誰もサンタを信じていなくとも、

例えサンタが存在してなくとも、

全ての人に平等にその日はやってくる。

その当たり前の出来事が、

その当たり前に当り前のヤツと過ごせる当り前の日が、今の俺には嬉しく思える。

俺の居場所はここなんだと、

俺のセカイはここなんだと、実感出来る。それがなんとも嬉しい。

っと、少し感傷的になりすぎたか。

まあ、早い話が……あれだ。

サンタクロースが実在しているようにしていないからって、

自分がサンタクロースであろうとそうでなからって、

プレゼントを渡す権利くらいは誰にでもあるよな？

都合良く一人になれた。

都合良く店に入れた。

都合良く“ブツ”を手に入れた。

後は俺の気持ち次第……いや、これもすでにクリア済みだ。

勇気ならもらった。覚悟は……たぶん出来ている。

時計の長針があと二十度ほど傾けば平等に訪れる日が来る。タイミング的にマンションの真下くらいになるだろう。それくらいになったらハルヒを呼びとめたらいい。

どつやって止めるか、なんて悩んでいない。こついつときのセリ
フは昔から決まっている。そうだと、ハルヒ？

『メリークリスマス』

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7424s/>

晴れ時々サンタクロース

2011年4月25日21時11分発行